留学報告書

2015 年 10 月より若手医師海外派遣制度を用い、ケンタッキー大学形成外科に留学させていただいた。その期間は派遣制度に援助していただいた 3 か月間に、2 か月強の私費での滞在を加えた 5 か月強であった。

この留学では、多くの手術を見学し、私自身そして筑波大学形成外科として経験の少ない部分を補うことが主目的であった。分野としては特に手外科、頭蓋顎顔面外科に重きを置いて臨んだ。また日本とアメリカの医療の違いを知ることもまた大きな目的の 1 つであった。

■UK Health Care

ケンタッキー大学はレキシントンというケンタッキー州で 2 番目の規模の都市にある。ここはケンタッキー大学を中心にした街で、町のあらゆるところに University of Kentucky（UK）のグッズのお店があり、街中には UK のトレーナーやら T シャツやらを着た子供からおじいさんまでを頻回に見かけることができる。フットボールやバスケットボールなどの大学スポーツがとても盛んな街であった。

そんなケンタッキー大学には UK Health Care という大学病院があり、私はそこに毎日通っていた。とても大きな施設でありその中に含まれる手術室だけでも 37 室あった（近隣の関連する施設を合わせるともっと多い）。そこで形成外科は月曜日から金曜日まで毎日手術を行っていた。同日に 3 部屋を並列で使用することは当たり前で、多い時には 5 部屋並列で進行することもあった。その中で私は数多くの症例みることができた。残念ながら手を洗って術野に入ることはできなかったが、逆に自由に動くことができたため、結果的にはたくさんの症例を取捨選択して見ることができて良かったと思う。

当初の目的であった手外科の分野では外傷が多く、中でも四肢の遊離皮弁を用いた再建手術を複数回見ることができた。レシピエント血管の選択の方針と自動吻合器の使用が当科と大きく異なっておりとても参考になった。また頭蓋顎顔面領域では、日本にいてなかなか見ることができないものとして Gunshot による顔面外傷を 4 例見ることができた。新鮮例から陳旧例の再建まで立ち会うことができた。特殊な損傷ではあるが、この経験は大きな組織欠損を伴う顔面外傷へ応用できそうであった。また興味のあった頭蓋縫合早期癒合症の頭蓋形成術、眼窩骨折整復術などの症例も比較的多く経験できた。他の分野では、アメリカには日本人と比べとても大きい体格の方が多く、美容的側面からの body contouring の手術も数多く行われており新鮮な経験であった。

また日本では流行っていないがアメリカでは同種移植の製品がかなり利用されていることがとても興味深かった。細胞成分を取り除いた同種の真皮、神経、骨移植材料が積極的に利用されており、結果も良いとのことで患者負担軽減につながっていると思われた。

ケンタッキー大学形成外科ではこのように数多くの手術をこなしているが、そこで働く形成外科指導医は 5 人、レジデント 10 人程度であり、外来に出ている先生を差し引くと、決して多い人数ではない。しかし、手術の入室、手術の準備、退室の一連の流れに無駄がな

く、指導医の先生が次々と手術を効率よく進められるように、周囲のスタッフが動いていたのが印象的であった。

■外来

外来は毎日行っており、ほとんどの日で午前午後と全日で行われていた。診察室は基本的に個室であり、個室に入った患者さんを、学生、インターン、研修医が先ず診察し、問題のありそうな症例を指導医とともに診察するという形式であり、患者数が多いにもかかわらず教育を大事にしている姿勢が印象的であった。

こちらでは術後の入院期間が短いため、吸引ドレーンを自宅管理している患者さんは珍しくなかった。一方術後安静が守れなかったことが原因と思われる術後血種などの症例も散見された。

外来での臨床写真は専門のスタッフが外来の一室である写真室で撮影し、撮影後すぐに写真専用の端末にデータが移行していた。部屋、機材、そしてスタッフ、さらに個人情報管理の点においても理想的な環境であった。

■教育

教育面では学生、インターン、レジデントに対して、彼らの教育のために週に 3~4 回程度カンファランスと称した講義形式のプレゼンテーションが指導医の先生から行われていた。新専門医制度を迎えるこれからの日本において見習うべき点が多いと思われた。また医学生は日本でいうジュニアレジデントのような扱いであり、見学というよりはチームの一員といった状態であった。

私は残念ながら診療に貢献できない見学者であったが、ケンタッキー大学の指導医、レジデント、学生さん、秘書さんにとてもよくしていただいた。こちらから診療面で役に立てることはなかったため、違った形での貢献をお願いされ、カンファランスでレクチャー形式の 40 分程度のプレゼンテーションを 2 回と、レジデント教育としてラットを用いた 1 回 3 時間程度のマイクロサージャリートレーニングを計 10 回程度行った。マイクロサージャリートレーニングは手術勘を無くさないという点で私にとっても有意義な時間であった。ちなみに 1 週間 5 回のマイクロサージャリートレーニングには＄1500 の自己負担が必要とのことであった。

■Kleinert Kutz Hand Care Center

この留学期間中に、ケンタッキー大学形成外科のボスから、同じくケンタッキー州のルイビル大学を紹介していただき、そことパートナーシップを結んだ Kleinert Kutz Hand Care Center という手外科専門の施設へも足を運んだ。Dr. Kleinert は世界的に高名な手外科医であり、また、この施設は世界に先駆けて同種手移植を行ったことでも有名な施設でもあった。

ここでは形成外科医と整形外科医からなる手外科専門の指導医が 11 人、世界各所から集まった 18 人のフェローが診療を行っていた。この Center は 5 つの病院を抱えており、それぞれの施設で外来、手術が毎日行われていた。多い時には 1 日 1 施設で 25 件の手術をこ

なしていた。私は2週間の間その施設を自由に行き来し、効率的に見学することでき、手術手技や、研修システムを学ぶことができた。

■最後に

　今回留学するにあたり、サポートをしていただいた国際連携推進室の方々、そしてそれを後押ししていただいた教授はじめ形成外科チームのメンバーに深く感謝しております。

　ありがとうございました。

形成外科　佐々木薫